

パウロはミレトスにつきました。そこからパウロはエフェソには寄らずエルサレムに向かうことにしていました。それでパウロはエフェソの教会の長老たちを呼んで、別れの言葉を語る、それが今日の場面です。

これまでパウロの伝道旅行という言葉を使ってきましたが、旅行という言葉でこんにちわたしたちが思い描くような快適さとはおおよそかけ離れたものでした。ここを離れたら今度いつ会えるかは全くわからない、そういう環境だったのだと思います。まして、パウロがここで言うように、自分の身の上はこれからさらに苦難や困難が想像できるというような状況ではなおさらでした。

もう二度と会うことはできないだろう、パウロはエフェソの教会の長老を呼んでこれだけは語っておきたい、ということをごここで語るのです。これはパウロの遺言だ、という人もいます。

パウロはまず、エフェソの長老たちにあなた方とともにどのように自分が歩んできたか、これまでの歩みを語ります。「自分を全く取るに足りない者と思い、涙を流しながら、また、ユダヤ人の数々の陰謀によってこの身に降りかかってきた試練に遭いながらも、主にお仕えしてきました。」

涙と試練の中で、主に仕えてきた、それがこれまでのパウロの歩みでした。

パウロは主に仕えて「神にたいする悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、ユダヤ人にもギリシア人にも力強く証ししてきた」、そして彼は「自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません。」と語るのです。

主に仕える、それはパウロにとって、キリストへの信仰を証しすること、神の恵みの福音を証しする、ということでした。

19節の「自分を全く取るに足りないものと思い」という言葉は謙遜の限りを尽くしてきた、という意味の言葉です。

主に仕える、ということは自己実現とか、自己充足を追い求める、という生き方とは全く違う生き方です。信仰においてすら人は自分の満足を満たすためのものにしようとしません。自分がいかに安心し、いかに平安になれるか。確か

に、信仰は結果として安心や平安の中に生きるということはあるでしょう。しかし、それが目的でも、それが最も大事なことなのでもない。パウロにとって信仰とは、自己実現とか、自己充足ではない。主に仕えること。その一点から自分を生きるのです。謙遜の限りを尽くす、ということを書き出すのは、パウロにとって謙遜とは、自分の考えによって生きる生き方から、主の言葉によって生きることへの転換だからです。自己放棄なのです。

パウロはユダヤ教徒であった時、熱心に律法の教えを守ろうとしていました。それが神に喜ばれることだと信じていました。しかし、自分の熱心が信仰になっていくのです。律法厳守というその自分の努力が信仰の内実のようになってしまう。

もちろんパウロはそのことを全く自覚していませんでした。

イエス・キリストに出会い、キリストの十字架と復活の信実によって救われ活かされることを知った時、初めて、自分の信仰とは自己の追求だったことを知るのです。ユダヤ人の数々の陰謀、という何とも恐ろしい言葉が出てきますが、それはまさに、自分の熱心が信仰だ、ということへわたしたちを誘い込む陰謀です。キリストの言葉に聞いて生きることよりも、自分の満足、自分の充足、自分の納得が信仰であり、自分のがんばりや自分の努力によって生きることへ人々を誘導する、それが陰謀です。仕えるということはAからBに生き方を変えるということではなく、そうやって自分で判断して生きてきた自分が、自分で判断するのではなく、キリストに従って生きる、ということなのです。仕えること、信仰は、自己放棄なのです。

最初にこれはパウロの遺言だと言う人もいる、と言いました。福音書を読むと、主イエスがご自分の死が近づいた時、どのような告別の言葉を語ったのかが、記されています。主イエスは告別の言葉の中で、わたしの弟子である者は「給仕する者」「仕える者」であるわたしを模範としなさい、という言葉が語られました。仕えるものとして主イエスを模範とするのです。とすれば、パウロはここで、エフェソの教会の長老たちに、主に仕えるものとなって、キリストにつながるものとなりなさい、という告別の言葉を語っているのではないか。

パウロはその際、わたしに倣うものとなりなさい、と語ってはばからない。

だからこそ、パウロはエフェソの長老たちに自分のことを語る。だがこれは自分の成果を誇示するとか、自分の業績の大きさを謙遜ぶって自慢するということはまったく違うこと。自分を放棄して、主に仕えるそのわたしを見てあなたも仕えるものとして生きなさい、と語るためなのです。

主イエスの福音の信実を活かされるということは、主イエスに従う人々の生活の中に必ず体現されるはずで、もし福音の信実を生かされていることが体現されないとするなら、福音は単なる知識、単なる学問的な議論、たんに情緒的なものということになってしまう。パウロは主に仕える、という歩みは、自分の生活の中に体現されていると信じていました。だから自分のことを語ることが福音を語ることだったのです。ここには謙遜と大胆があります。

もう一つ大事なことがここで語られています。

「そして今、わたしは、霊に促されてエルサレムに行きます。」と言っていることです。エルサレムに行くことは投獄の可能性やさらなる苦難の可能性が予測できた。けれども霊に促されて、エルサレムに行く、というのです。

霊に促されてとは、もとの言葉は「霊に縛られて」という言葉です。さきほど、AかBか自分で判断していたのをやめて、キリストに従って生きると申し上げましたが、それは霊に縛られての判断、ということなのです。

いったい霊に縛られて判断する、とはどういうことなのでしょう。

それは自分が自分になるのは、自分の中にある声ではなく、自分の外から呼びかけてくる声に聞いていくことによってである、ということです。わたしの中にはいろんな声がいっぱい詰まっています。その声が、これはした方がいいとか、したら損をするとか、これはやりたいとか、実に様々自分に向かって語りかけてくるのです。しかし、自分が自分となるのは、自分に呼びかける外からの声に聞くこと、その声が指し示すところに聞き続ける、ことなのです。例えば、ペトロは十字架に向かうキリストを三度知らないと言いました。それは自分の中にある声だった。あなたもあの人と一緒にいただろうと言われたとき、わたしはその人のことは知らない、と言った、それはペトロの中にある声でした。しかしペトロは復活の主イエスに出会ってから後、自分の中に響いている声ではなく、裏切った自分をも十字架において担い、キリストの恵みの中で生かしてくださる方の言葉に聞くことで自分が自分になるということをペトロは経験していく。そして彼はその後の生涯を外からの声、キリストの声に聞くことで自分が自分となることを経験していく。

霊に縛られて、霊に促されてとは、外からの声に聞き続けるよう促していく力です。キリストの声に、自分を越えたものからの声に聞くよう促していく力、パウロはその力に縛られて、キリストの声に聞き、キリストの仕えるものとされていった。

だから彼はエフェソの長老たちに、あなたがたはこの霊の力において、教会

を守り導くものとして立てられているのだ、ということ語り、最後に、「そして今、神とその恵みの言葉とにあなた方を委ねます。」と言ったのです。

大事なことは、自分の中にある声に聞くことではなく、外から呼びかける声に聞くこと。霊はそれを促す力だ。呼びかける声に聞いて、自分になる。その自分は自分に仕える自分ではなく、主に仕える自分です。もちろん、自分の中にある声との葛藤は途切れることはない。自分の中にある声ばかり聞こえて、呼びかける声がかき消されてしまいそうになることもあります。しかしそこには霊の働きがある。霊が働いている。呼びかけるキリストの声に聞いていきなさい。キリストのみ言葉にあなた方を委ねる。それがエフェソの教会の長老たちへのパウロの決別の言葉でした。そして皆で一緒にひざまずいて共に祈った。涙を流し、抱き合い、別れたのです。パウロが彼らに最後に語った言葉、「神とその恵みの言葉とにあなた方を委ねます。この言葉はあなたがたを造り上げ、聖なるものとされたすべての人々共に恵みを受け継がせることができます。」その言葉に長老たちは繰り返し帰っていったのです。